

本連載の28回から3回にわたって日本の新宗教を受容する人々の意識と行動についてフィールド調査の結果をもとに考察した。今回からは実際に日本の宗教がどのように受容されているのか、ブラジルの宗教的コンテキストに基づいて教団ごとに比較検討したい。ここで筆者が着目するのは個々の信者の改宗(入信)のありようである。それらを信者へのインタビュー調査をもとに論じたい。日本の新宗教がブラジルの宗教風土の中でどのように組み込まれ、それをどのように変容するに至っているのか、また日本の新宗教もそれによってどのように変容することになるのか、さらには各教団に通底する共通点を明らかにするとともに教団の独自性を明らかにしたい。

### 天理教

「元の理」というオリジナルな創世神話を持つ天理教に入信した人々の語りには、これとの比較において以前の宗教を論じているケースが目立つ。天理教を受容するまで熱心なカトリック信者であった人ならば「元の理」が聖書との対比において語られ、またそれほど熱心でなかったとしても「元の理」を学ぶことが聖書との比較を促しているようである。以下では、経典的カトリシズム (Vol.14 No.8) とフォークカトリシズムの場合 (Vol.14 No.8)、それにカルデシズム (Vol.15 No.3-No.8) とプロテスタント系ペンテコステ派 (Vol.14 No.11) からの入信事例をとりあげる。なお、信者は仮名で記している。

#### (1) 経典的カトリシズムの場合

57歳の女性ホザナはカトリックに熱心な両親に育てられ、若いころから聖書を真面目に学んできたという。入信してから調査時点で6年になる。彼女は友人の紹介で天理教の教会を訪れ、入信することにした。入信にあたって解決すべき問題を抱えていたわけではなかった。彼女の夫はカトリック信者で日曜日のミサには欠かさず通っている。妻の天理教への入信には反対しておらず、むしろ教会の月次祭にも参拝するほどである。

彼女は友人の勧めで1991年にノルデステ芳洋教会で行われた5日間の教義講習会、その後ブラジル伝道庁の修養会に参加した。そこでは集中的に教理の学習に励むが、彼女はそこで「真理」と「辿るべき道」を見つけたという。では、彼女の言う「真理」あるいは「辿るべき道」とは何を指しているのだろうか。彼女はカトリック教徒として聖書に慣れ親しんできた。そこで「聖書」のなかではどのように「真理」が語られているのかを確認しておこう。

ポルトガル語の聖書に記されている「verdade (真理、真実)」という語は、次のように3つに分類することができるように思われる。

#### ア) イエス=真理

彼らは来て、イエスに言った。「先生、わたしたちは、あなたが真実な方で、だれをもはばからぬ方であることを知っています。人々を分け隔てせず、真理に基づいて神の道を教えておられるからです。(マルコ 12:14、マタイ 22:15-16)

#### イ) 神=真実

上から来られる方は、…見たこと、聞いたことを証しされるが、誰もその証を受け入れない。その証を受け入れる者

は、神が真実であることを確認したことになる。(ヨハネ 3:31-33、黙示録 15:3-4)

#### ウ) イエスの属性(証し、言葉)=真理

真理によって、彼らを聖なる者としてください。あなたの御言葉は真理です。(ヨハネ 5:31-33、17:17、エフェソ 1:13) すなわち、「真理」とは、イエスであり、神であり、イエスの属性としての証や言葉などである。これらを象徴するのは次の章句といえるだろう。熱心なキリスト教信者の常套句ともいえる。

イエスは言われた。「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない。」(ヨハネ 14:4-6)

しかしながら、彼女が表現しようとしている「真理」は、このような聖書の文脈における「父のもとに通じる道」のみではない。彼女はそれを次のように語る。

96年におぢば(天理教の聖地)に帰りました。長旅で夜、神殿に着いたのですが、人間の宿し込みの場所を間近に見ることができたのです。そのとき、真理を感じたんです。人間の誕生の場所がわかったんです。カトリックでは疑問がありました。

彼女がいわんとする「真理」とは、人間が宿し込まれたという「場所」である。聖書には、すでにイエスが「道」であり「真理」であると説かれている。にもかかわらず、彼女にはそれだけを「真理」として受けとめるには不十分だったという。彼女が求めていたのは、「真理」を発動する「人」のみならず「場所」でもあった。彼女は、神によって人間が創られたとカトリシズムで聞いていたが、「何処で」それがなされたのかはわからなかった。彼女はその「場所」を必要としていたのである。

経典的カトリシズムでは救済者イエスが強調されるが、救済を発動する「場所」としての「真理」は意識されていない。「ぢば」は、「元の理」という救済史神話の源泉であることから信仰が求められ醸成される場所である。彼女はそれまでのカトリックの信仰では納得しきれなかった部分を天理教の教えで補ったのだ。彼女にとって「真理」の再解釈は、新たな信仰の受容を正当化するうえで重要な要因となった。

入信当時、彼女は友人が病気に悩んでいることを知ると、会長を紹介して天理教の「たすけの業」である「おさづけ」を取り次いでもらうことにしていた。そして、「おさづけ」の理を拝戴してからは自らを取り次ぐようになった。彼女のこうした変化は教会長との出会いが生んだものだといえる。

彼女は天理教に入信して教会長と「理の親子」関係という絆を結んだ。そして、教会長を母親のように慕い仰ぐようになった。教会長の「人だすけ」の実践を傍で見て、教会長へのカリスマを感じたという。

経典的カトリシズムの立場から天理教を受容することは、それまでの信仰信念を支えてきたであろう聖書の語りが基盤となっている。それがホザナの場合には、「verdade (真実、真理)」という言葉に象徴されていた。しかし、彼女にとってその言葉はもはや聖書の文脈を超えた意味を持っている。とはいうものの、彼女はキリスト教の信仰を否定したわけではない。天理教の信仰はその延長線上にあるといえる。